

## 「納屋を焼く」における雑種性の政治学

—— 南部における「粗野な民主主義」の誕生を巡って ——

森 有礼

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) は、彼の故郷であるアメリカ南部のラファイエット郡 (Lafayette County) を元にヨクナパトーフア (Yoknapatawpha) と名付けた架空の地域に根差した作品を多く残した。この土地を舞台として創作した前期の代表作である『響きと怒り』 (The Sound and the Fury 1929)、『八月の光』 (Light in August 1932)、『アブサロム、アブサロム!』 (Absalom, Absalom! 1936)、そして『行け、モーセ』 (Go Down, Moses 1942) の内、『響きと怒り』以外は白人と黑人による人種混淆をその主要モチーフとして扱っているが、そのためかフォークナー批評においては、フォークナーは人種問題を扱う作家であるという評価が定まっている。

しかし実際にはフォークナーの小説の殆どに、ヨクナパトーフア郡における白人社会の多様性とその社会の内部における階級対立という主題が窺える。初期の代表的なフォークナー批評家の一人であるクレアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) は、そうしたフォークナー世界の白人の間の、特に階級的多様性に対する観察力と彼等

に対する作家の共感について次のように述べている。

Through the planter families of the Old South and the Negroes play a very important part in Faulkner's novels, the folk who dominate much of his fiction are descendants neither of the old ruling class nor of the slaves. They are white people, many of them poor, and most of them living on farms; but they are not to be put down necessarily as "poor whites" and certainly not necessarily as "white trash."... The usual account of the Southern social structure as it existed just before the Civil War depicted a tripartite division: there were the Negro slaves, of course, and there were the very wealthy plantation owners, and there were also the poorer whites, who, according to this account, had been pushed off the fertile land and back onto the pine barrens or onto the sterile hills. Here they lived by small farming, the proceeds of which they eked out with hunting and fishing. They were represented as being in general a shiftless, illiterate, and often vicious group of people... But Faulkner frequently reveals his sympathies with the characters who come of poor-white stock, seeing in them an integrity, dignity, and sense of values which is not at all commensurate with their inadequacies in speaking or writing formal English. Faulkner is also very much aware of the niceties of social structure which distinguishes the yeoman farmer from the tenant farmer and which sees within the category of the tenant farmer a variety of types ranging from the honest and often shrewd man of poor fortune to the embittered

tered or numbed landless peasant and on to the happy-go-lucky buffoon or the thoroughgoing rogue. (Brooks 10-11)

ブルックスが着目しているのは、(旧)プランテーション貴族と(旧)黒人奴隷との間に存在する多層的な白人の階級である。彼等は支配階級に属している訳でも富裕階級でもないものの、土地を所有する比較的裕福な独立自営農業者 (yeoman) から借地農業者 (tenant)、そして経済的には困窮する分益小作人 (sharecropper) に到る多様な経済的・社会的立場にある「普通の人々 (plain people)」(Brooks 10) である。

本論はフォークナーが描く「普通の人々」の社会に焦点を当て、その社会の多層性の特徴と、そこにおける階級差の問題について、白人の「雑種性 (mongrel)」という概念を援用しつつ考察する。具体的にはフォークナーの1939年の短編「納屋は燃える」(■Barn Burning■) に焦点を当てつつ、二十世紀初頭における優生学的文脈におけるプア・ホワイトの表象とその政治的意義について考察する。

「納屋は燃える」についての具体的な議論の前に、まず本論における「雑種性 (mongrel)」という言葉の意味と、二十世紀初頭のアメリカにおける優生思想の実態について確認しておきたい。OEDによれば、■mongrel■は ■the offspring of two different breeds of dog. Chiefly, and now only, a dog of no definable breed, resulting from various crossings.■ と定義されており、「異なる品種の間の仔」、特に「様々な品種の雑種であり、その種が不明であるもの」を指す。また人間については ■a person not of pure

race; the offspring of parents of different nationalities, or high and low birth.■ とあり、「人種や国籍、身分が異なる者同士の子供」を指す。同じく「雑種性」と訳される ■hybrid■ については ■the offspring of two animals or plants of different species, or (less strictly) varieties.■ と定義されているが、両者を比較すると、■mongrel■ には単に複数の種/品種の交雑から成るものという ■hybrid■ の持つ意味に加えて、その出自の曖昧性を暗示する意味合いがであることが分かる。

本論においては、こうしたより広範な意味を持つ ■mongrel■ を指して「雑種（性）」という語で表現する。序章でも触れたように、フォークナーの初期代表作においては、しばしば人種混淆、即ち白人と黒人の人種的ハイブリディティが問題とされた。しかし序章で触れたブルックスの一節は、南部の白人の間に存在する多層的な社会的・階級的及び経済的差異が存在すると共に、そうした差異が暗示する社会的・経済的背景についても暗示している。それは南部の白人社会が、(旧)プランテーション貴族を頂点としてプア・ホワイト・トラッシュへ、つまり「真正/純血 (genuine)」な白人から身元不詳の「雑種」へと何重にも階層化されていることを意味している。そして本論が扱う「納屋は燃える」は、こうした白人社会の殆ど最下層に置かれたスノープス (Snopes) 一家を巡る物語であることを、ここで確認しておきたい。

もう一点確認すべきは、「納屋は燃える」の舞台となった二十世紀初頭とほぼ同時代の遺伝学の状況である。富山太佳夫は心理学者兼優生学者ヘンリー・ゴダード (Henry H. Goddard) による1912年の著書『カリカック一族 遺伝と精神薄弱の研究』(The Kallikak Family: A Study in the Heredity of Feeble-Mindedness) を参照しつつ、遺伝の影響を巡る当時の状況を概括する。ニュージャー

ジー州ヴァインランドの精神薄弱者訓練学校の責任者であったゴダードは、そこに収容された精神遅滞の若い女性デボラ・カリカック (Deborah Kallikak) の祖先について、独立戦争期から二十世紀に亘る調査結果をまとめた。その結果は『カリカック一族』に収められた家系図<sup>(1)</sup>で確認できる。図の中央に位置する父マーティン (Martin Kallikak, Sr.) を起点として、彼が精神薄弱 (feeble-minded) の内縁の妻との間に設けた家系 (図右側) には精神薄弱の子孫ばかりが誕生しているのに対し、正常 (normal) な女性と正式 (lawful) な結婚をして築いた家系 (図左側) では代々正常な子孫が生まれる。父マーティンの私生児であったと同じ名の息子 (Martin Kallikak, Jr.) は、「母の性質遺伝的にうけつぐとともに、四八〇人にも及ぶ子孫たちの起源」(富山 187) であり、ゴダードによればその内訳は「一四三名が確実な証拠のある精神薄弱」で「健常者は四十六名」に過ぎず、「残りは不明、もしくは精神薄弱の疑いがある。」また「三十三名は性的に不道德で、多くが売春婦」であり、「二十四名が間違いなくアルコール依存症」で「三名が癩患者」、「三名が犯罪者」、そして「八名は悪評のある家の者」(Goddard 18-19) であった。一方「父マーティンの嫡出子達 (legitimate children)」は全員「植民地時代の統治者や独立宣言の起草者、兵士や有名大学の創立者の子孫」といったニュージャージー州の「最良の家柄の人々と結婚」し、「医師、法律家、判事、教育者、貿易商人、地主」といった「立派な市民 (respectable citizens)」(Goddard 29-30) となる。こうした「すぐれた血統の家系と汚れた血統の家系のこの残忍なばかりの対比」(富山 189) が意味するのは、「[種の] 退化が、最初は名もなき精神薄弱の少女によって、後には他から追加された汚染によって、精神的欠陥と悪しき血筋が、良い血筋に齎された結果」(Goddard 69) であると指摘しつつ、富

山はそこに「黒人と白人の関係や移民問題...をも含む人種差別のイデオロギー」(富山 190) を看取する。

富山の指摘は、「精神薄弱という現象と遺伝学の応用と犯罪学を一挙に結びつけ」(富山 190) ることで、「遺伝学と犯罪学が手をつないで社会の管理に手を貸そう」(富山 191) としている点に垣間見える優生思想の暗い目的、即ちカリカックー族のような「[社会的] 不適者や弱者は...排除され、隔離され、処分されなければならない」(富山 203) という願望を明らかにしている。この文脈において富山はフォークナーの『サンクチュアリ』(Sanctuary 1931) に登場するギャングスターのポパイ (Popeye) に言及し、常に黒衣を纏ったポパイの「奇妙に血色の悪い顔色」や「黒いゴム製のドアノブのような双眸」(Sanctuary 4)、そして「熱い火の側に置き忘れられた蠟人形の顔のように形の崩れた顔」(Sanctuary 5) は、「[社会] 不適合者」である「退化人間」(富山 211) のそれであると述べる。さらに「プロのスト破り」(Sanctuary 303) であった父と身持ちの悪い母との間に生まれた彼は先天性の「梅毒」(富山 211; Arnold and Trouard 238) を患っており、小柄で虚弱体質の身体と残虐な犯罪性向を生まれ持つ「遺伝的な犯罪者類型」(富山 211) であることを指摘することで、ポパイの遺伝的異常性が作中で裏打ちされていると主張する<sup>(2)</sup>。

ここまでの議論を振り返ると、ゴダードの、そして優生学の主張と懸念が、同じ白人という種における優良種と劣等種の交配が齎す民族的な退化の不安であることは明白である。それは世紀転換期のアメリカに、広く社会進化論 (Social Darwinism) 的言説が流布していたこととも関連する。リチャード・ホフスタッター (Richard Hofstadter) は当時の社会の退化に関するアメリカの不安を次のように要約する。

Doubtless the rapid urbanization of American life, which created great slums in which were massed the diseased, the deficient, and the demented, had much to do with the rise of eugenics.... As more and more diseased and defective families in great cities came to the attention of physicians and social workers, it was easy to confuse the rising mass of known cases with a real increase. The influx of a large immigrant population from peasant countries of central and southern Europe, hard to assimilate because of rustic habits and language barriers, gave color to the notion that immigration was lowering the standard of American intelligence. ... The apparent economic deceleration at the end of the century was also seen by many observers as the beginning of a national decline; and it was in accordance with the habits of a Darwinized era to find in this apparent social decline a biological deterioration associated with the disappearance of "the American type." (Hofstadter 162-63)

ここで触れられているのは都市部に流入する東欧や南欧からの移民による、所謂アメリカの国家身体の「汚染」と弱体化に対する不安であるが、ニュージャージーの山峡の村まで赴いてカリカック一族の係累について調査を行ったゴダードの以下の主張も、基本的にはホフスタッターの説明と大差ない。

If all of the slum districts of our cities were removed tomorrow and model tenements built in their places, we would still have slums in a week's time, because we have these mentally defective people who can never be taught to live otherwise than as they have been living. Not until we take care of

this class and see to it that their lives are guided by intelligent people, shall we remove these sores from our social life.

There are Killikak families all about us. They are multiplying at twice the rate of the general population, and not until we recognize this fact, and work on this basis, will we begin to solve these social problems. (Goddard 70-71)

ゴダードにとって精神薄弱とは一つの階級 (class) であり人種 (race) である。彼等は社会に偏在し、驚くべき速さで増殖する少年期のボパイの犯罪性向を描写した語を用いれば「矯正不可能な (incorrigible)」(Sanctuary 309) 存在である。そして何よりこうした特定の一団は、「一般の人々」に倍する速さで繁殖しつつ社会を蝕む「雑種」という白人の中の異人種であるというのが、ゴダードの主張の要諦である。つまりゴダードは、アメリカの「真正な」白人社会が、精神薄弱という「雑種」に浸食されることで、つまり両者の「混血」によって劣化してゆくことへの警鐘として『カリカクー族』を記したので<sup>(3)</sup>。

但しここで断っておかねばならないのは、ゴダードは「精神薄弱」という語を、今日的な意味で言えば極めて曖昧な形で用いている点だ。彼は現在の精神医学における知的障害 (intellectual disability) を含む相当に広範な知的・道徳的・倫理的及び刑法犯的範疇に亘って「精神薄弱」という語を用いており、先にも述べたようにそこには犯罪者、(当時の) 道徳的社会規範の逸脱者、器質性疾患患者及び(『サンクチュアリ』のボパイのように) 犯罪性向を持つと推測される者が含まれている。そうした人物達が「カリカクー族」という血統の類比によってアメリカの「一般人」から区別されゴダード好みの言い方をすれば「隔離 (segregation)」(Goddard 60) されることで、再びアメリカの国家身体を純化することがゴ



ダードの意図だとすれば、それは極めて乱暴だが分かり易い目標である。ひと言で言えば、彼の狙いは「純血の（白人の）アメリカ」を取り戻すため、「雑種」の白人を社会から排斥することなのだ。そして「間違いなく、それがフォークナーの青春時代のひとつの断面であった」（富山 210）と述べる富山は、フォークナーもまたこうした社会的文脈において創作を行ってきたと断言する。

では、フォークナーにおける「雑種」の白人とはどのような存在であり、彼等はどのように描かれているか。それを確認することが、本論次節の目的となる。

「納屋は燃える」は 1939 年 6 月に Harper's Magazine 誌に掲載された短編であり、その後出版されたフォークナーの『短編集』（Collected Stories of William Faulkner 1950）の冒頭にも収録された。フォークナーの代表的な傑作短編の一つ（Hamblin and Peek 28; Volpe 232）とされている。ハンス・シェイ（Hans H. Skei）によれば、本作は 1940 年に刊行された長編小説『村』（The Hamlet）の冒頭を飾る章として構想された（Skei 55-56）が、その後作家が「本作が『村』に収まる場所がない」（Selected Letter 197）ことに気付いたため、独立した短編として発表された（Hamblin and Peek 28）。本作はブア・ホワイトであるアブナー・スノーブス（Abner Snopes; アブ [Ab]）一家に焦点を当て、彼とその息子カーネル・サートリス・スノーブス（Colonel Sartoris Snopes; サーティ [Sarty]）との関係を巡って描かれる。父であるアブは、妻、長男フレム（Flem）、双子の二人の娘及び十歳の次男サーティを連れて馬車で転々と放浪しながら小作人として働いているが、周

困の人々と衝突する度に建造物に放火を繰り返す気性の激しい男である。物語の中心となるのは、大地主であるド・スペイン少佐 (Major de Spain) の屋敷の高価な絨毯をアブが馬糞で汚し、その弁償を巡って両者が巡回裁判で対立した結果、アブがド・スペイン少佐の納屋に放火しようとする一連の場面である。サーティは父の命に背いてその蛮行をド・スペイン少佐に警告しようとその屋敷に向かい、そこで夜空に燃え上がる炎と、ド・スペイン少佐一行が放つ銃声を耳にする。父の安否が分からないまま、サーティが独り未明の森の中に消えてゆくところで物語は終わる。

このように本作はアブと、彼と対立する人々との衝突を描いているが、そこで注意すべきは、アブ達スノープス家の人々がどのような存在として表象されているかである。本作の冒頭で、アブは「納屋への放火犯 (Barn Burner!)」(CS 5) の疑いで裁判に掛けられている。彼は放し飼いにしていた自分の豚が地主のハリス氏 (Mr. Harris) の豚小屋に紛れ込んでいたため、その世話代としてードルを請求されると、ハリス氏に対して黒人を遣って「薪や乾草が燃えるぞ」と警告し、その後ハリス氏の納屋が燃えたことから嫌疑を掛けられている。裁判でハリス氏は、アブに豚を囲っておく柵を作るための針金を与え、さらには次に豚が自分のところに迷い込んだら手間賃を取ると警告したが、アブはその針金を庭に放り出したまま再び豚を逃がしてしまい、結局ードルを払う羽目になったことを逆恨みしたとされている。このエピソードはアブが怠惰で粗暴な人物であり、そしてその心中に「貪婪で嫉妬深い憤怒 (that ravening and jealous rage)」(CS 11) を秘めていることを表している。また彼の「狼のような独立心と勇気 (wolflike independence and even courage)」、そして「心に秘められた飽くなき凶暴さ (latent ravening ferocity)」持ち、「自分のものでないものを飽かずに浪

費する生まれつきの性質 (an inherent veracious prodigality with material not his own)」を「体の中に (in his blood)」備えていながら、「小さく細やかで、殆どしみったれたような焚火」(CS 7) しか熾さない様子は、彼の残酷な貪欲さと放縦さと共に奇妙な吝嗇さを物語ると共に、その「顔も奥行きもなく まるでブリキ板から切り取られたような黒く平らで血の気の通っていない」(CS 8) 姿 (それは『サンクチュアリ』のポパイと同質の、無機質で奥行きのない非人間的な様子を連想させる) と相俟って、アブの辻褄の合わない人格の異質さを窺わせる。

そうした異質さはアブのみならず、彼の家族達からも看取できる。アブが周囲と諍いを起こす毎に引っ越しを繰り返してきた一家は、この裁判の翌日、別の仕事に就くために粗末な荒ら屋に移り住む。

To-morrow they were there. In the early afternoon the wagon stopped before a paintless two-room house identical almost with the dozen others it had stopped before even in the boy's ten years, and again, as on the other dozen occasions, his mother and aunt got down and began to unload the wagon, although his two sisters and his father and brother had not moved.

"Likely hit ain't fittin for hawgs," one of the sisters said.

"Nevertheless, fit it will and you'll hog it and like it," his father said. "Get out of them chairs and help your Ma unload."

The two sisters got down, big, bovine, in a flutter of cheap ribbons; one of them drew from the jumbled wagon bed a battered lantern, the other a worn broom. (CS 8-9)

小作人用の破屋を仮住まいとするスノーブスー家の、特にサーティ

の二人の姉は、その「太って気怠そうな (broad and lethargic)」(CS 13) とか「大柄で牛のように鈍重な」という表現と、身に付けている「安っぽいリボン」、そしてアブの「お前も豚みたいにこの家が気に入るさ」という台詞からの連想、さらに語り手が彼女達を形容する「双子で同じ時に生まれたが、どちらも今や家族の他の二人を併せても敵わない程の大きさと重さの、生きた肉の塊という印象を与える」(CS 23) 様子は、不活発で怠惰で愚鈍な存在という印象を与える。またその「ガタピシするワゴンの床」から出てくる「ボロボロのランタンや擦り切れた簾」は、彼等の貧困さを強調する。それは単なる物質的貧しさのみならず、家長であるアブの異質さとも相俟って、スノープス家自身の精神的な退廃を感じさせる。それは『カリカック一族』においてゴダードが紹介する、カリカック家の末裔の家を訪れた際の救いのなさに通じるものを感じさせる。

It was a bitter, cold day in February and about eleven in the morning when the field worker knocked at the door. Used as she was to sights of misery and degradation, she [the field worker] was hardly prepared for the spectacle within. The father, a strong, healthy, broad-shouldered man, was sitting helplessly in a corner. The mother, a pretty woman still, with remnants of ragged garments drawn about her, sat in a chair, the picture of despondency. Three children, scantily clad and with shoes that would barely hold together, stood about with drooping jaws and the unmistakable look of the feeble-minded... The father himself, though strong and vigorous, showed by his face that he had only a child's mentality. The mother in her filth and rags was also a child. (Goddard 77-78)

ここに見られる「悲惨な退廃」の理由を精神薄弱に帰するゴダードの主張の是非はともかくとして、「救いのない」困窮状態にあるこの一家の精神的な停滞状況を、スノープス一家のそれと重ねてみることは左程的外れではないだろう。さらに事ある毎に放火を企てるアブの様子は、『サンクチュアリ』に登場するボパイの祖母の放火癖を想起させる。要するにアブ達スノープス一家の異質さは、二十世紀初頭の優生学的文脈における社会的不適合者のそれを表象していると言える。前節のゴダードの言葉を借りれば、「カリカックの一族は我々皆の傍にいる」(Goddard 71) 訳だが、ここからスノープスもまたそうした(白人における)「異常」な「雑種」の種族の一つであるという暗示を看取するのは難しいことではない。

そうした要素をフォークナーが確信犯的に提示しているのが、父のアブに逆らうことのできない息子サーティを束縛する「古くから流れる激しい血の影響 (the old fierce pull of blood)」(CS 3) である。物語の終盤、アブが放火の準備をサーティに手伝わせようとする場面で、サーティは次のように葛藤する。

"Go to the barn and get that can of oil we were oiling the wagon with," he [Ab] said. The boy [Sarty] did not move. Then he could speak.

"What..." he cried. "What are you..."

"Go get that oil," his father said. "Go."

Then he was moving, running, outside the house, toward the stable: this the old habit, the old blood which he had not been permitted to choose for himself, which had been bequeathed him willy nilly and which had run for so long (and who knew where, battenning on what of outrage and savagery and lust) before it came to him. I could keep on, he

thought. I could run on and on and never look back, never need to see his face again. Only I can't. I can't, the rusted can in his hand now, the liquid splashing in it as he ran back to the house and into it, into the sound of this mother's weeping in the next room, and handed the can to his father. (CS 21)

少年が父の峻厳な命令に否応なく従わざるを得ないのは、彼が「有無を言わず受け継いだ...旧い血」に対する「血縁に基づく忠誠心 (Blood loyalty)」(Volpe 235) である<sup>(4)</sup>。「旧い血」という悪しき生得的要因がサーティの「道徳心 (morality)」(Skei 58) を圧倒する様子は、フォークナーが『カリカック一族』を読んでいたと言いたくなる程に個人に対する遺伝の支配力を物語ると共に、そうした危険で劣悪な遺伝形質を引き継ぐスノープス一家が、紛れもなくカリカックの眷属に連なることを読者に実感させる。

だがこうしたスノープス一家への評価は、ゴダードを始めとして、自らの白人としての真正さにも、その社会的優位についても疑念の余地のない、それ故カリカックの一族を「白人における異なる種族」と看做し、彼等の窮状を一顧だにしない者達の階級意識が形成したものであることは留意せねばならない。次節では、スノープスと南部白人社会との対立を巡って考察を進める。

本論冒頭でも触れたが、フォークナーはヨクナパトーフア小説の殆ど最初の作品から、白人社会における階級的多様性、より直截的に言えば南部の白人社会とスノープス一族との対立の主題について構想していた。所謂ヨクナパトーフアという物語世界が登場するの

は、1929年に刊行された長編小説『サートリス』(Sartoris)からであるが、そこには既に南部の白人貴族階級であるサートリス家と、サートリス家に嫁ぐナーシサ・ベンボウ(Narcissa Benbow)に横恋慕して猥褻な手紙を送りつける青年バイロン・スノープス(Byron Snopes)との対比が窺われる。スノープス一族の南部白人社会への参入/侵入という、『村』において作品として完成した物語は、『サートリス』よりもさらに早く、1927年に執筆された未完の断章『父なるアブラハム』(Father Abraham 1983)を下敷きとしたものである。『父なるアブラハム』には、アブ・スノープスの長男フレム(Flem)が、ブルックスの言葉を借りれば「松林の荒地」<sup>(5)</sup>や「不毛な土地」であったフレンチマンズ・ベンド(Frenchman's Bend)の開拓地から貪欲な新興勢力として頭角を現し、土地の有力者ウィル・ヴァーナー(Will Varner)の娘ユーラ(Eula)が私生児を身籠った際に、ヴァーナー家の体面を守るという口実で彼女と結婚し、それをきっかけとして南部の町ジェファソン(Jefferson)の銀行の頭取へと登り詰めるという、『村』のストーリーの骨子が既に窺える。「納屋は燃える」が、実質的にスノープス一家を明確にジェファソンの白人中産階級と対立した存在として描き出した最初の作品であることを鑑みれば、フォークナーが本作に込めた意図は明らかである。スノープス一族はジェファソンの中心となる白人中産階級に対するアンチテーゼであり、階級的にも「人種」的にもその他者なのだ。

とは言え、一方ではスノープス一家はゴダードが言うような意味での「社会的不適合者/精神薄弱者」ではなく、寧ろ南部における階級的抑圧の犠牲者とも言える。本作において、アブ達ブア・ホワイトと、ド・スペイン少佐に代表される地主階級との決定的な社会的差異が対比されるのは次の場面である。

They [Ab and Sarty] walked beside a fence massed with honeysuckle and Cherokee roses and came to a gate swinging open between two brick pillars, and now, beyond a sweep of drive, he [Sarty] saw the house for the first time and at that instance he forgot his gather and the terror and despair both, and even when he remembered his father again (who had not stopped) the terror and despair did not return. Because, for all the twelve movings, they had sojourned until now in a poor county, a land of small farms and fields and houses, and he had never see na house like this before. Hit's big as a courthouse he thought quietly, with a surge of peace and joy whose reason he could not have thought into words, being too young for that: they are safe from him [Ab]. People whose lives are a part of this peace and dignity and beyond his touch, he no more to them than a buzzing wasp: capable of stinging for a little moment but that's all; the spell of this peace and dignity rendering even the barns and stable and cribs which belong to it impervious to the puny flames he might contrive... (CS 10)

威風堂々たるド・スペインの屋敷はサーティを魅了し、また圧倒する。その「裁判所の様に大きな」建物は、彼の眼には「羽音を立てる似我蜂」のような父アブの「斉薺な付け火になどびくともしない」「平和と威厳」に満ちた世界として映る。一方でアブにとってこの「綺麗で真っ白な」屋敷は「黒人の汗」によって築かれており、それでもまだ足りないために地主は「白人の汗もそこに混ぜ込もうとしている」(CS 12) と感じられる。アブのこのセリフは白人の小作人と黒人労働者の待遇の近さを暗示するが、新たにド・スペイン



家の小作人に雇われた際にアブが言う「明日から八か月の間、俺の体も魂も所有しようっていう相手と話があるんだ」(CS 9) という台詞は、「分益小作人制度の非人間性と屈辱」(Skei 57) を端的に物語っている。それは既に単なる労働契約というよりは寧ろ地主と小作人との立場の違いとして構造化された絶対的な社会格差であり、この格差を前にしては、いみじくもサーティが直感的に理解したようにアブの存在は蠅螂之斧も同然である。同じ一つの屋敷にこの父子はかくも異なった意味を読み取るが、それは息子の希望と憧憬に対する父の絶望と怨嗟とを表しており、同時にアブが分益小作人制度の「不公正な経済・社会制度に絶えず曝された犠牲者」(Volpe 233) であることも示している。

だからこそアブはこの社会構造に対して、無駄だと分かっているも一矢報わずにはいられない。彼は屋敷への道すがら、道に落ちていた馬糞を踏み引き、その靴のままでド・スペインの屋敷に踏み入って高価な絨毯を汚損する。ド・スペインはアブの元に汚れた絨毯を持ってきて洗濯するよう命じるが、アブはそれを自家製の強アルカリ液で洗って台無しにしてしまう。激怒したド・スペインは、アブの収穫から玉蜀黍二十ブッシェルを以て絨毯の損害を弁償するよう契約を書き換える。アブはド・スペインの要求を退けるよう訴訟を起こし、最終的に請求の半額分の玉蜀黍を以て弁済する判決が下される。しかしアブはそれでは気が済まず、長男のフレムと共に灯油を携えてド・スペインの納屋に放火しようと試みる。

一連のアブの行動は理不尽で不合理ではあるが、しかしそもそも彼の眼にはド・スペイン家そのものが既に法外な存在として映っていることは留意せねばならない。事の発端は、「灰色の頭でリンネルの上着を着た年老いた黒人」召使による「靴を拭ってください」(CS 11) という静止を振り切り、アブがド・スペイン家に汚れた

靴で踏み入ったことである。彼は『アブサロム、アブサロム!』に登場する同じブア・ホワイトのトマス・サトペン (Thomas Sutpen) やウォッシュ・ジョーンズ (Wash Johns) のように、屋敷の入り口で黒人召使に押し留められることなく、「どけ、黒ん坊 (■Get out of my way, nigger,■)」(CS 11) と言って屋敷に踏み入り、「黄金の絨毯に足跡を付ける」(CS 12)。こうした挑発行為に、黒人でありながらド・スペインの威を借りて白人に命令する相手に対するアブの人種主義的な反発を看することは容易いが、同時にそれはアブを「辛い経験を重ねた流れ者の小作人 (an embittered, itinerant sharecropper)」(Doyle 293) の立場に追い込んだ社会に対する憤激の発露であり、さらに彼はそうした「階級的怨恨を裕福な隣人に対する不毛な訴訟として発散」し、「それが不首尾に終わると夜陰に乗じて納屋を焼く」(Doyle 294)。それは「無力で無能な人間による意気地のない復讐」(Doyle 294) ではあるものの、アブにしてみれば自分を遥かに凌駕する富と地位を持ち、その上でさらに彼の心身をも束縛し搾取しようとする富裕階級に対しては、ある意味当然の報復である。有体に言えば、彼は社会が自分の人生から奪ったものの代償を、自らに取り戻すのではなく、相手にも同等の損失を与えることによって帳尻を合わせようとしているのだ。

それ故、アブの行為は本質的に倒錯的である。例えばド・スペインの絨毯を汚損した一件を巡る損害賠償の裁判の席で、アブは自分の責任について次のように否定する。

"And you [Ab] claim twenty bushels of corn is too high for the damage you did to the rug?"

"He [Major de Spain's man] brought the rug to me and said he wanted the tracks washed out of it. I washed the

tracks out and took the rug back to him."

"But you didn't carry the rug back to him in the same condition it was in before you made the tracks on it."

His [Sarty's] father did not answer, and now for perhaps half a minute there was no sound at all save that of breathing, the faint, steady suspiration of complete and intent listening.

"You decline to answer that, Mr. Snopes?" Again his father did not answer. "I'm going to find against you, Mr. Snopes. I'm going to find that you were responsible for the injury to Major de Spain's rug and hold you liable for it... (CS 18)

アブの主張は、自分はド・スペイン側に命じられた通りにしたまでであり、命令に従って行動した結果は、命令した側が負うべきであるというものである。これこそがアブの報復戦術である。彼は自らが相手に与えた損害（絨毯の汚損）を契機として、その原状回復が失敗したのは、それを要求した側の責任であるとする事で、最初の損害と併せて、絨毯の最終的な被害を命令した所有者側に帰することを意図している。しかもそれは単に責任を逃れるとためだけに言っているのではなく、それによって相手が激怒することを理解した上での挑発であり侮辱でもあるのだ。無論そうした主張が判事に認められる訳ではないが、それは既にアブを小作人として「所有」することで彼の主体から自尊心を奪った上で、さらに当然のこととして賠償を請求する富裕階級に対する、持たざる側の者による抵抗であり復讐である。

こうしたアブの復讐は、フリードリヒ・ニーチェが言う「<sup>ルサンチ</sup>怨恨の<sup>マン</sup>念」(56)に基づいていることは言を俟たない。

道徳における奴隷の反乱はまず、怨恨の念そのものが創造する力をもつようになる、価値を生みだすことから始まる。このルサンチマンは、あるものに本当の意味で反応すること、すなわち行動によって反応することができないために、想像だけの復讐によって、その埋め合わせをするような人のルサンチマンである。すべての高貴な道徳は、勝ち誇るような肯定の言葉、然りて自己を肯定することから生まれるものである。ところが奴隷の道徳は最初から、「外にあるもの」を、「他なるもの」を、「自己ならざるもの」を、否定の言葉、否で否定する。この否定の言葉、否が彼らの創造的な行為なのだ。…ルサンチマンの人間が考える「敵」がどのようなものか、想像してみていただきたい。これこそがルサンチマンの人間の行為であり、創造物である。「悪しき敵」を考えだし、「悪人」というものを考えたしたのは、まさにこのルサンチマンの人間なのである。しかもそれを基礎概念として、その模像として、対照的な像として「善人」なるものを考えたしたのである。この善人こそ、自分だというわけだ！（ニーチェ 56-57, 63）

アブの行動の根源にあるのは、まさにこの種のルサンチマンである。彼は実際にド・スペイン達富裕階級の人間と敵対し、これを打ち倒そうとはしない（それは反乱であり、革命の試みである）。そうではなく、自らを犠牲者の立場に置き、その犠牲を強いる存在としての敵の姿を、支配階級の白人達に見出し、彼等に自らが被った損失や喪失（とアブ自身が考えるもの）の幾ばくかでも与えようとしているのだ。

しかし本論はアブの（ニーチェの言葉を借りれば）「奴隷」根性を非難するために彼の言葉を引いたのではない。寧ろニーチェの言う「高貴な道徳」を自らが備えていると考える「生まれの良い者た

ち」(ニーチェ 59) や「高貴な人間」(ニーチェ 60)こそが、アブ達を奴隷と看做し、そのように扱う社会構造が、ニーチェ自身の中に、延いてはフォークナーが描く南部の白人社会として存在している。それは間違いなくゴダードが『カリカック一族』を執筆する際に、そしてド・スペインに代表される所謂ジェファソンの富裕階級がアブを訴えた際に共有していた自己認識でもある。それは自身とアブとの経済的格差及び階級差をアブリオリなものとして彼との本質的差異 つまり「真正な」白人と「雑種」という別の人種へと敷衍し固定化する、無自覚だが「矯正不可能」な選民意識である。そしてこの無意識の選民意識に基づいて、ハリス氏やド・スペイン少佐はアブによる損害賠償を彼に請求することになる。

しかしそうした損害賠償請求も、冷静に見れば決して公平かつ妥当なものとは言い難い。ド・スペインが例の絨毯についての弁償をアブに要求する際、彼は次のように述べている。

"You [Ab] must realize you have ruined the rug. Wasn't there anybody here, any women..." he [de Spain] ceased, shaking, the boy [Sarty] watching him, the older brother leaning now in the stable door, chewing, blinking slowly and steadily at nothing apparently. "It cost a hundred dollars. But you never had a hundred dollars. You never will. So I'll add it in your twenty bushels of corn against your crop. I'll add it in your contract and when you come to the commissary you can sign it. That won't keep Mrs. de Spain quiet but maybe it will teach you to wipe your feet off before you enter her house again." (CS 16)

絨毯の弁済と称して百ドル分の玉蜀黍の徴収を契約書に追加するド・スペインは、それによってアブに懲罰と屈辱を与えようとしている

ことは明らかである。しかも彼は、その責任はアブにあると確信している。このロジックは、アブ自身のそれと本質的には同じである。その意味で、彼等もまたアブ同様の発想に立ち、その上でアブから、物質的・金銭的のみならず、心理的にも搾取しようとしているのは明らかである。南部の社会構造における両者の階級差を鑑みれば、彼等に対してアブには勝ち目はない。それ故に、アブは納屋を焼くという手段で、この心理的打撃を埋め合わせようと徒に抵抗するのだ。それ故、訴訟相手について「奴等は俺にやられたんで、俺に嫌がらせする機会を狙ってるだけなんだ」(CS 8) というアブの理解も、アブの訴訟相手が、自分自身と父の両方にとっての敵であるというサーティの認識も共に正しい。彼等は心理的に「法外な」請求をすることで、この父子を痛めつけているのだ。

但しサーティ自身は、裁判の目的が本来そうした嗜虐的な処罰にあるのではないことも理解している。裁判の席で彼が正直に証言するつもりだったことを見抜いたアブは、それを非難して少年を打つが、それに対して大人になったサーティは「もし彼等は本当のことを、公正なことを知りたかっただけなんだ、と言ったら、父はまた自分を殴っていただろう (If I had said they wanted only truth, justice, he would have hit me again.)」(CS 8) と呟いているが、それは彼が、裁判の本質が、原告と被告の双方にとっての「公正さ」を、つまり評決によって今後の遺恨を解消する解決と妥協とを齎すことにあることを正しく認識していたことの証左である。だからこそ一方でサーティは、玉蜀黍二十ブッシェルというド・スペインの理不尽で法外な要求についても、それによってアブの報復の連鎖を断つことを期待する。

Maybe this is the end of it. Maybe even that twenty bushels that seems hard to have to pay for just a rug will be a cheap

price for him [Ab] to stop forever and always from being what he used to be;... Maybe he [de Spain] won't collect the twenty bushels. Maybe it will all add up and balance and vanish - corn, rug, fire; the terror and grief, the being pulled two ways like between two teams of horses - gone, done with for ever and ever. (CS 17)

ここで分かるのは、サーティが、裁判が父と訴訟者との間の「負債 (balance)」を、物質的にも心理的にも帳消しにすること、それが無理なら、父自身が懲罰的な賠償請求に懲りて、その心理的負債を諦めることを望んでいることである。それはサーティの中に芽生えた当事者相互に対する公正さの意識である。実際のところ、ド・スペインによる二十ブッシェルの弁済請求に対して、判事はド・スペインの絨毯の価値を九割以上償却し、最終的には請求額のその半分を免除することで決着が着く。その意味で、法は当事者双方に対して一定の公正さを保っていると言ってよい。

しかしアブは決して彼が被った損失 それは金銭的なものだけでなく、彼の傷ついたプライドが負った心理的な負債でもある に対する埋め合わせを諦めない。キャロザースはこうしたアブとサーティの違いについて、「サーティが変わってゆく過程にあるのに対して、アブは彼自身でしかない」(Carothers 63) と述べているが、彼はどこまでもその損失の補償を求めて、その夜ド・スペインの屋敷に火を放とうとする。それはアブのいつもの遣り口であり、また彼は自らのプライドを僅かでも守るためにそれ以外の手段を知らない。最早変わることのできないアブを目にしてサーティが選択するのは、父の蛮行をド・スペインに告げることである。勿論それは父の意思と支配に背く行為であり、父 = 家族的紐帯の断絶を意味する。尤もそれは彼が父を裏切り、ド・スペインの側に付いたことを意味する

訳でも、また従来 of 批評において指摘されてきたように、彼自身が道徳的価値観において父を上回ったということでもない。実際のところ、納屋を放火されたド・スペインが放った銃声を耳にして、彼は父を案じながら涙を流すが、その顛末を知ることもなく独り丘の上に蹲り父のことを回想する。

Father. My father, he thought. "He was brave!" he cried suddenly, aloud but not loud, no more than a whisper: "He was! He was in the war! He was in Colonel Sartoris' cav'ry!" not knowing that his father had gone to that war a private in the dine old European sense, wearing no uniform, admitting the authority of and giving fidelity to no man or army or flag, going to war as Malbrouck himself did: for booty - it meant nothing and less than nothing to him if it were enemy booty or his own. (CS 24)

物語の語り手はアブが出征した意図について、敵味方を問わず戦利品目当てだったことを読者に伝えてサーティの期待を相対化するが、サーティはなお父が戦争に行った勇敢な男だったと信じており、彼を英雄視する姿勢は変わらない。その意味で、彼は依然としてスノープスの「旧い血」に対する忠誠心を失った訳でもなく、父を超える道徳的成長を果たしたとも断言できない。彼が「生まれ持った」雑種性が、この後どのように変わってゆくのかを示す手掛かりはそこには見つからない。

それでも二度に亘る裁判 一つはハリス氏による訴訟、もう一つはド・スペイン少佐に対する父が起こした訴訟 を経て、サーティは法が「真実と公正さ」を保障することを知る。父の放火を通報しようとする彼の行為は、この法の保障に基づくものであり、アブが試みようとする不毛で暴力的な報復の連鎖を食い止めようとするこ

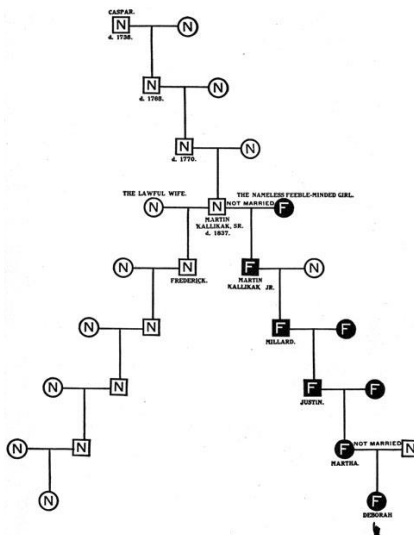


とである。彼の行為は実際には徒労に終わり、ド・スペインの納屋は燃やされ、父の安否は不明なままとなるが、そうした現実に対する「悲嘆と絶望」(CS 24)を経て、彼は民主的な 相互に法の定めに服するという 社会の在り方を選択する。こうしたサーティの選択とその限界を通じて、「納屋は燃える」は、長らく続く南部の暴力の伝統から、極めて粗野で原始的ではあるものの、民主主義的な社会に対する第一歩を示していると言えよう。家族からも南部の社会からも離れて、未明の暗い森の中へと下ってゆくサーティは、フォークナーの物語には二度と登場しない。「後ろを振り返ることなく」(CS 25) 歩んでゆく少年の姿が暗示するのが、南部における新しい社会と政治の可能性なのか、それともそうした可能性が実現しないという未来なのかは、本作からは断言できない。

本論文は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）による基盤研究（C）（一般）「ハリウッド時代のフォークナーとメイル・ショーヴィニズム」（研究代表者森有礼、課題番号 22K00414）の成果の一部である。

## 註

- (1) カリカッター族の家系図 (ゴダード 36)。カリカッター家自体は独立戦争前から存在していたが、確認できる始祖であるキャスパー・カリカック (Casper Kallikak) から数えて四代目であるマーティン Sr.から、氏名不詳の少女との内縁関係から生じた家系と、正式な結婚を経て生まれた子孫に亘る家系の二つに分岐しながら、1910年代のデボラまで連綿と二つの家系が続いている。なおスティー



ヴン・グールド (Stephen Jay Gould) によれば、「カリカック」という苗字はギリシャ語で美 (beauty) を表す語 (kallos) と悪 (bad) を表す語 (kakos) を組み合わせてゴダードが作り上げた架空の名である (Gould 198)。

- (2) ポパイの遺伝的犯罪性向について論じる際には、彼の祖母にも触れねばならないだろう。彼女には衝動制御障碍の一つである放火癖 (pyromania) があり、自宅に繰り返し放火を試み、最後にはそのために自らも焼死する。フォークナーにおける犯罪性向を持つ登場人物としては、次節で採り上げる「納屋は燃える」にも同様の放火癖を持つキャラクターが登場するが、これらの例は、フォークナーが社会不適合者の指標としてこの障碍を扱っていることを窺わせる。
- (3) 註1にあるカリカッター族の系譜図は、中央のマーティン・カリカック Sr. を起点として二つの家系が分岐しているが、ゴダードはそれを黒い「異常者」= 遺伝的障碍と看做された症状を呈した者達と、白い「普通の人々」とで区分けしている。マーティン Sr. と結婚した氏名不

詳の少女と、彼が「正式な」結婚をした女性との対比を、「白と黒」で色分けしている様子は、富山が指摘しているようにこれらが人種混淆の暗喩となっていることを窺わせる。また森は Gamwell と Tomes を引きつつ、「劣悪形質、特に精神異常 (insanity) の遺伝による退化 (degradation) の概念は、当時道徳的な因果応報という意味合いに彩られていた。...精神異常の遺伝は自然の摂理であり、親の不品行が次世代の弱体化をもたらすと言った類の理論が当時の社会規範を...個人に強要したり、売春等の非道徳的行為を抑制したりする際に正当化していた [Gamwell and Tomes 124-27]」(16) と述べている。

- (4) エドモンド・ヴォルプ (Edmond L. Volpe) 以外にも、「納屋は燃える」の主題をサーティが抱く「個人と道徳、忠誠心と選択の間の葛藤」(Skei 58) と看做し、本作を「家族に対する忠誠心と...他人への公正さと正義との間...で引き裂かれた」サーティが、「その忠誠心を試された結果、自分の中の『善なる』性質が勝利する」(Skei 60) 物語だとするシェイやジェイムズ・キャロザーズ (James Charothers 62) のような批評家がいる。
- (5) ブルックス自身も序章の引用で触れているように、松林は土地の荒廃と貧困の象徴として扱われている。『カリカック族』の批判的検証を試みるグールドも、ゴダードがカリカック家の末裔を探し求める調査員をニュージャージーの「不毛な松林 (the pine barrens)」(Gould 199) に送り込んだと、実際にはゴダード自身はそうした語を全く用いていないにも拘らず述べている。こうした一種の言い間違い (a slip of the tongue) は、カリカック家を巡る優生学的連想の何たるかを我々に想起させる。この文脈においては、本作はシェイが指摘するように、サーティの「イニシエーション、成長、そして成熟」(Skei 58) を描く物語としても解釈できる。

#### 引用文献

- Arnold, Edwin T. and Dawn Trouard. Reading Faulkner: Sanctuary. UP of Mississippi, 1996.
- Brooks, Cleanth. William Faulkner: The Yoknapatawpha County. Louisiana State UP, 1963.

- Carothers, James. B. William Faulkner's Short Stories. UMI 1985.
- Doyle, Don H. Faulkner's County: The Historical Roots of Yoknapatawpha. U of North Carolina P, 2001.
- Faulkner, William. "Barn Burning." 1939. Collected Stories of William Faulkner. 1950. Vintage, 1995. 3-25.
- . Father Abraham. Random House, 1983.
- . Sanctuary. Vintage, 1993.
- . Selected Letters of William Faulkner. Ed. Joseph Blotner. Random House, 1977.
- Gamwell, Lynn and Nancy Tomes. Madness in America: Cultural and Medical perceptions of Mental Illness Before 1914. Cornell UP, 1995.
- Goddard, Henry Herbert. The Kallikak Family: A Study in the Heredity of Feeble-Mindedness. 1912. Macmillan 1931. Rpt. Arno Press, 1973.
- Gould, Stephen Jay. The Mismeasure of Man. 1981. Rev. and expanded ed. Norton, 1996.
- Hamblin, Robert W. and Charles A. Peek. A William Faulkner Encyclopedia. Greenwood P, 1999.
- Hofstadter, Richard. Social Darwinism in American Thought. 1944. Rev. ed. Beacon, 1955.
- 森有礼. 「大衆の粛清: Sanctuaryにおける知識階級と社会決定論」『名古屋大学文学部研究論集』124 巻・文学 42 号 (1996)、29-47.
- ニーチェ, フリードリヒ. 『道徳の系譜学』中山元訳. 講談社古典新訳文庫. 光文社、2009.
- Skei, Hans H. Reading Faulkner's Best Short Stories. U of South Carolina P, 1999.
- 富山太佳夫. 『ポパイの陰に 漱石/フォークナー/文化史』みすず書房、1996.
- Volpe, Edmond L. A reader's Guide to William Faulkner: The Short Stories. Syracuse UP, 2004.